

A Catwalk across the Great Divide: Redesigning the History Teaching Method Course

大いなる断絶の間にある狭い通路：歴史教育法の授業をリデザインすること

担当：川口広美（広島大学大学院教育学研究科）

hkawaguchi@hiroshima-u.ac.jp

■著者情報

①著者名：G. Williamson McDiarmid

研究関心：教育政策・教育行政。学校教育改善、特別支援教育などの観点から取り組む。最新の著作は、Lessons from the Teachers for a New Era Project: Evidence and Accountability in Teacher Education(2017, Routledge)。

経歴：ギリシャ・イギリス・アラスカなどで歴史と英文学を教える。その後、ミシガン州立大学(Michigan State University)及びアラスカ大学アンカレッジ校で歴史教育法を担当。その際、教員の学習に関する国立研究センター(National Center for Research on Teacher Learning)でコーディネーターを行う。アラスカ大学アンカレッジ校、ワシントン大学シアトル校を経て、現在はノースカロライナ大学チャペルヒル校の特別荣誉教授(Alumni Distinguished Professor)を務める。

②著者名：Peter Vinten-Johansen

研究関心：医学・健康史(history of medicine and health care)やヨーロッパのインテレクチュアル・ヒストリーに主要な関心を持っている。歴史学者であるが、教師教育学科に所属していたこともあり、歴史に関するペダゴジーに関する論文も執筆している。著作としては、麻酔学者・疫学者のパイオニア的存在であったジョン・スノウに関する伝記である Cholera, Chloroform, and the Science of Medicine: A Life of John Snow (Oxford University Press, 2003)がある。

■重要な用語

- ・disciplinary：学問的
- ・professional：専門的⇔scholarship, academic：学術的
- ・subject-matter knowledge：教科専門的知識
- ・issue：イシュー、problem:問題

■ひとこと概要

筆者たちは、歴史教育の伝統的な教員養成が歴史学と教育学に分離していることを問題視している。なぜなら、歴史学の授業を受けても、教育法の授業を受けても、共に彼らが受けてきた教育観から解き放たれないからである。この状況では、現在州や国のスタンダードで求められているような歴史的探究を実現することは難しい。こうした問題状況を打破するために、歴史学の教員である Vinten-Johansen と教育学の教員である McDiarmid が連携して、歴史教育法の授業を改革した。本稿は、彼らの改革の概要と成果と課題を示したものである。

■ まとめ

0. はじめに

(問題) 伝統的にある歴史学者と教育学者の間の断絶。教員養成で協力することは少ない。

(理由)

(1) 歴史学部と教育学部の文化的差異

歴史学部:長い学問的伝統 (disciplinary tradition)

⇔教育学部:心理学・社会学・哲学・歴史学などの多様な学問系統からなる専門プログラム

(2) 組織や大学文化自体の断絶

・教員養成＝「全学的」な責任で行うといいながら、専門学問に関する (disciplinary) スタッフ (faculty) や教育に関するリソースやインセンティブは欠落する傾向。

・特に研究大学の歴史学部のスタッフにとっては、教育学部のスタッフ (faculty) との仕事は、昇進やテニユアを得ることに関係することはほとんどないこともあり、消極的である。

1. 将来の歴史教師の学びに関する先行研究

(背景) 先行調査

- | |
|---|
| <p>① 初心者向けの歴史史料 (historiography) に関するセミナー: 歴史的知識が論争的であること、歴史的説明 (historical accounts) のプロセスは継続的で明確ではないことを学んだ</p> <p>② しかしながら、ほとんどの学生の歴史教育観は変容しなかった。</p> <p>③ セミナーの方法を自らの実践で取り入れられない理由: 1) 「誰か」 (はっきりしない権威) が、教師がそうしたアプローチを用いることを許さないから。2) 子どもも取り入れたがらないだろうとするから。</p> <p>④ 社会科教育法を受けた後であっても、歴史学に関する学部生レベルの研究を行っても、教育観は変容しない。</p> |
|---|

→歴史教師が歴史教育を「知識の貯蔵」をメインにするのではなく、変革を行うためにはどうしたらいいのか?

2. 大いなる断絶の間にある狭い通路: 概要

(試みの概要) ミシガン州立大学において7年間に及ぶ教育学部と歴史学部の断絶を繋ぐプロジェクト

→教師達は、歴史概念・知識・思考方法を学ぶべきだという前提

(計画の前提) ホルムスグループによる5年間プログラムをベースに実施

- ① 3つのコア・アイディア: (例) 子どもたちのエスニシティと社会文化的背景に配慮することなど
- ② 教師教育を真に全学的な責任として捉え、教員養成学部だけのものにしない。
- ③ 既に実施していた Vinten-Johansen との初歩歴史学セミナーとのコラボレーションを元に、根本的に教育法のコースを見直す (事例は1993年に始まった TE401/2 コース)

(教師の背景) ・Vinten-Johansen: インテレクチュアル・ヒストリーを研究する歴史学者、授業力向上にも関心

・McDiarmid: 教育学者、当時歴史的探究を調査していた

→お互いの知見を持ち寄り共同的な授業を行った (この成果は4つの論文となっている)

3. 教育法の建て直しに関する最初の試み

(1) デザイン

- ・TE401/2：コースワークと実習、1年間のインターンシップからなる3年間のコースの一部
- ・教育法：教科専門的知識（subject matter knowledge）、探究を入れこんだ短期間の歴史のワークショップ
→Vinten-Johansen による企画運営

(2) 問題

- ・学生からの反発（教育法の授業への期待・前提知識とのズレ）「このコースは歴史の授業みたいだ」
- ・即効性を求める学生「月曜日に何したらいいんですか？」

4. 仮説に再度戻る

- ・目標：学生達の行う授業実践と関連性を持たせる形で歴史的・社会的探究に従事させること
- そのためには、①実習で直面する教科専門に関する方法と関連させること、②国家あるいは州のスタンダードとの関連していることを明確にすることで、重要性を認識させるべきという認識。

5. 単一のデバイス以上のものとなるために：カリキュラムユニット開発

(1) 再設定したコースの目標

- ①自分自身の実践と教科専門をベースとした教育法のコースが関連していると思えるようになること、②子ども達を州・国家スタンダードに合致できるように準備させること。

→この目標を達成するためのストラテジー：「カリキュラムユニット開発」を導入

- ①多様な思考方法を導入できる、②実際に使うことができるプロダクトもある

(2) カリキュラムユニット開発に必要となる資質

- ①教科専門に関する知識：PCK＝学問的知識＋学問的知識をどのようにその子どもに伝えることが有効か、に関する知識
- ②教授活動における認知的要請に関する信念：例えば、議論によって、どのような精神行動（認識する、関連づける、分析する）などが想起されるか
- ③州や国家スタンダードに準拠した生徒の学習目標（goals and objectives）の認識：活動先行ではなく、目的準拠での授業作りをする。同時にスタンダードについてもきちんと認識しているかを確認する
- ④評価ストラテジーを利用する：生徒の経験から評価について狭い認識をしている学生に対し、教育活動や評価活動は学校を出た後も活用できる重要な意味を持つことを示す

6. カリキュラムユニット開発のプロセス

①イシューについて認識・調査・ライティングする。

- ・徹底的に自分が開発するカリキュラムの周辺にある歴史的な問題やトピックについて調べる
→現代の子ども達に繋がるような「フック」を見つけるため
- ・1セメ：クラス全体で1つのユニットプランを開発（文化・スタンダード・教科書・歴史学者の議論）
- ・2セメ：自分たちで選択する（社会・子ども・学問・州のスタンダード・調査可能なものという観点）

②イシューについてのタイムラインを作成する：「あなたの設定した課題を伝えるためにどのような事象を取り上げることが重要か？そして、それはどのように並べたらいいか？」を尋ねる。

③開発チームの学生達で「批判的同僚」を務める：関連した関心を持つ学生達で相互交流する

④リーディング・ライティングに関する活動や課題などの教授活動を理解する：活動と認知活動との関連性、「真実さ」（by ニューマン）との関連性

⑤特別支援児童に対する代替活動を理解する：各活動が生徒のどのような能力を必要とするかを把握し、その活動が困難な生徒に対して代替策を考える

⑥単元の一部を実践する：本来は実習校での実践を考えていたが難しかったため、代替案を行った

⑦学習の評価、計画の見直し、個々人のウェブページへの掲載：「生徒」からの批判を受けて計画を見直す。ウェブページへ掲載することで全ての生徒が見られるようにした。

7. 安心（reassurance）を与える必要性

- ・いきなり全部の単元を新しく開発するのではなく、徐々に新しい単元を作成していくことが重要。
- ・教科書をベースにしたカリキュラム開発についても同様に進める必要がある。1年間、こうした安心（reassurance）を与えるためのカウンセリングを実施した。

8. イシューベースのカリキュラムユニット開発アプローチに関するエビデンス

・実習校での実施は困難であったため、卒業生に声をかけ、同意した者に対し、インタビューかメールで尋ねた（結果）

- ・長期間のカリキュラム開発が主であったため、日々の授業プランについては余りうまくできなかった
- ・日時というような単純な情報を伝達することについては、教科書ベースで授業を作ったほうが良かった。それよりも、より深い歴史的事象の理解に繋がった。
- ・イシューベースのカリキュラム開発は学生によっては、非常に難しい（demanding）なものであった。

9. 結論：意義と限界

(1) 意義

- ・プランを作ることを通じ、イシューや問題についてより深い理解ができる＋生徒のより深い学びを促せる
→イシューベースのカリキュラムユニット開発アプローチは一定の成果
- ・授業を作る際に十分な準備ができるかに関する不安を収めながら、教科専門の問題に根ざした教師の経験を重視できる。(即時に用いることができるものであるため)
- ・歴史学部とコラボレーションすることで、学生の専攻に関わらず、多様な場面で行ってきた歴史学のコースで行ってきたこと・こなかったことの双方に関する情報を提供することができる

(2) 限界

- ・大学当局の意向はあったが、個人間でのコラボレーションに留まった
- ・組織的に行われなかったために、コラボレーション自体が不安定であった
→この後に、McDiarmid がミシガン州立大学から異動したが、後で入った教育学の担当教員は「歴史学的すぎる」としてコラボレーションを拒否した

(3) 今後の方向性と課題

- ・「狭い通路 (cat walk)」を作るには、最初のつかみ (=インセンティブ) が必要
- ・フォローアップの調査ができなかったのは、ミシガン州立大学の卒業生があまりに多かったことと、卒業生へのインタビューの許可を得ることが難しかったことにある。
- ・すぐに「大いなる断絶 (the Great Divide)」を解決することは不可能であろう。ただ、我々の試みが基盤となってくれるといいと思う。イシューベースのカリキュラム開発は有効なペダゴジーの基礎となるだろうし、安心を与える活動 (reassurance) はまさに、教員養成学部がなすべき役割である。

■ 議論したいこと

- ・多様なバックグラウンドである私たちは、どのような歴史教育法 (地理歴史科教育論 or 概論) の授業を受けてきたか？それは効果的であったか？そうでなかったか？ (+そう思う理由)
- ・イシューベースのカリキュラムユニット開発は、日本においても効果的であるのか？
- ・日本における歴史学と教育学の断絶と、近年の歴史 (学) 教育書の出版ブームについてどのように考えているか？